



木炭生産では若い生産者が参入

# 特用林産物の 生産動向等について

今年も平成 19 年特用林産物の生産動向が公表されました。

その結果、昨年に引き続き「しいたけ」をはじめとする  
きのこ類の需要、国産への関心が高いことが改めてわかりました。

## 昨年引き続き 国産のニーズが上昇

特用林産物とは、食用きのこ類、木の実類、山菜類のほか、非食用の木炭、竹材、うるしなど、森林原野を起源とする生産物のうち、一般用材を除くものの総称です。現在は平地で栽培されていても、もともとは山地や森林原野で採られていた「えのきたけ」や「ぶなしめじ」なども含まれます。

特用林産物の生産は、林業生産の

中でも重要な位置にあり、地域経済の振興、就労の場の確保に大きな役割を果たしているといえます。

平成十九年の特用林産物の生産動向において、「しいたけ」の生産量と生産額を見ると一つの特徴が表れてきます。「乾しいたけ」は天候不順などを理由に生産量が減少しましたが、生産額は増加。これは中国産離れが進み、国産の需要が高まったことにより国産の単価が大幅に上がったためです。また、「生しいたけ」は生産量、生産額共に増加する一方

で、輸入量が四割も減りました。きこの類は健康面からも注目される食材であることに、品種自体の増加やより安全なものを求める消費者の意向も加わり、今後も国産へのニーズは高まるでしょう。

一方、非食用の特用林産物は全体の生産量自体が落ちていくという結果になりました。とはいえ、木炭に關しては昨今の原油高の影響で、燃料としてのニーズが高まっているほか、和歌山県や高知県といった生産地では若い生産者が参入するなど、状況としては明るいと考えるでしょう。しかし、竹材については需要が減少しているため、新しい用途の開発やコスト面など需要拡大に向けた取り組みが必要です。

ユニークなところでは、伊勢神宮の式年遷宮や日光東照宮の修理の影響で、うるしの生産量、生産額が増加したことがあげられます。

こうした結果を見るだけでも、昨年に続き国産ブランドへの関心の高さが伺えます。この追い風に乗り、ニーズに合った特用林産物を供給することで、農山村をより活性化させていきたいと思います。



上：国産の需要が高まっている乾しいたけ  
下：生産量がわずかながら増加した生しいたけ

平成 19 年の主要な特用林産物の生産動向

区分	生産量 トン	対前年増減率 %	生産額 億円	対前年増減率 %	主要生産都道府県	備考	
食 の こ 類	乾しいたけ	3,566	- 7.6	162	12.9	大分、宮崎、熊本、岩手、愛媛	
	生しいたけ	67,155	1.2	753	2.5	徳島、群馬、岩手、北海道、栃木	
	なめこ	25,818	0.8	101	- 5.0	長野、新潟、山形、福島、群馬	
	えのきたけ	129,770	13.2	372	2.8	長野、新潟、福岡、北海道、長崎	
	ひらたけ	3,024	- 10.6	12	- 11.1	茨城、新潟、長崎、山形、静岡	
	ぶなしめじ	108,996	5.6	507	3.8	長野、新潟、福岡、香川、北海道	
	まいたけ	43,607	- 5.2	271	- 3.1	新潟、静岡、福岡、群馬、北海道	
	まつたけ	51	- 21.1	21	- 1.7	長野、広島、岩手、京都、岡山	
	その他	2,974	16.4	23	35.3		はたけしめじ、きくらげ類等
非食用							
竹材	1,143	- 4.0	10	- 7.4	鹿児島、熊本、大分、山口、福岡		
木炭	28,832	- 7.9	38	- 4.0	岩手、島根、北海道、福島、岐阜		